日本における身体観の現状¹

—現象学的観点からの分析—

滝 沢 文 雄 (千葉大学)²

Abstract

The purpose of this paper is to show clearly what our view of the human body in Japan is and how the present view of the human body is constructed. This study is considered from a phenomenological standpoint. The outline of this consideration is as follows: This document classifies the views of the human body as found in modern Japanese society. Using concrete examples to illustrate current ideas, this paper argues the modern view is not same as views held in the past. Furthermore, the background of this change is considered with reference to recent social change. Additionally, consideration is given to an original view of the human body in Japan which remains basically, in spite of the process of globalization which is said to reduce cultural originality.

The conclusion of this paper is that the Japanese had the view the body was a gift presented by nature and that nature was like a God. This body was in continuous harmony with the nature, and it was not to be treated as goods. This view is rare now and people perceive the body as the vessel of one's mind. The vessel itself has come to have a higher material value than in the past. Also, the idea of individual personality has become the same as the vessel which has valuable goods in distribution. In modern Japan, it can be said that the view of human body as goods is the main stream. The background of this view comes from the development of science, knowledge imparted by school education and the influence of science journalism. These influences encourage people to gaze at the body analytically from a scientific viewpoint. Nevertheless, Japanese still have a world view of plural cosmology - a world of multiple Gods and natural forces. These ideas are continually affecting our view of the body, although many people are unconscious of it. The Japanese modern view of the human body is problematic, because it lacks the idea of "the human body as a function", that realizes good life.

Key Words: Japan, one's view of the Human Body, formation, phenomenological analysis

キーワード：日本，身体観，生成，現象学的分析

¹ The Present State of One's View of the Human Body in Japan: Analysis based on a phenomenological viewpoint

² Fumio TAKIZAWA, Faculty of Education, Chiba University, 1-33 Yayoi-cho, Inage-ku, Chiba, 263-8522

1. 序 節

本考察の目的は、日本人が漠然と抱いている現代の身体観を明らかにし、その身体観がどのように成立しているのかを、現象学的観点から考察することである。本考察で扱う身体観とは、人々が生活の中で抱く「からだ」¹⁾の見方であり、必ずしも本人が自覚的であるとは限らない。また、現象学的観点とは、できる限り先入見を排除し、「事象そのものに」迫る哲学の一領域である²⁾。

はじめに問題の所在を明らかにしておきたい。現在の日本では、健康ブームを中心に「からだ」が注目されている一方で、子どもや青年にとどまらず中年の抱える精神的問題が話題にもなっている。この両者は多くの人々の関心を集めているにもかかわらず、関連づけもなく別々に扱われ論じられている。両者に関連はないのだろうか。過労死の問題は「からだ」の問題であり、小中学校における「いじめ」の問題も「からだ」に関わって生じている。また、身体装飾への関心は大きな消費を生み出し、特に若者文化としての外見重視は、常軌を逸している感がある。いわば「からだ」の商品化が蔓延しているとさえ言えよう。その中で最悪なのが援助交際という未成年者の売春である。買う側は裕福な大人であり、少女達は小遣い稼ぎの感覚で、みずからの「からだ」を商品として提供する。このことは、一部の日本人にしか当て嵌まらないとしても、正に身体観の異常さを象徴するものだと言えよう。これらの事柄は、「からだ」をどのように捉えるのか、すなわち「からだ」をどのように見るのかということが、問題把握の仕方を変えてしまうと、その見方が行動さえも規定してしまう、ということを示唆している。したがって、日本人の身体観およびその身体観の成立のメカニズムを探ることが必要となろう。

本考察は、歴史的研究でも社会学的研究でも

なく、日本人の身体観を現象学的に探るものである。よって、事象そのものにどれだけ迫ることができるか、また、その本質的な構造をいかに具体的事象から抽出できるかが重要となる³⁾。まず、現在の日本社会に現れている様々な身体観について、具体例を挙げながら分類し、それぞれを特徴づける。次に、より現代に象徴的な身体観を浮き彫りにするために、旧来の身体観について言及する。さらに、その旧来の身体観を背景に、現代の身体観がどのように生じているのかについて、労働状態の変化や情報社会への移行に関連づけて分析する。その際、グローバル化という社会的趨勢にもかかわらず、日本人の抱く身体観が現在なお独自性を保持していることにも注目する。最後に、現代の日本人が抱いている身体観について、さらに、どのようにその身体観が生成されているのか、について結論を述べたい。

2. 現代の日本における身体観

多くの人々はみずからの身体観に自覚的ではない。しかし無自覚とはいえず、現状は多くの身体観が混在していると言えよう。このことについて、日常生活の中で見聞きする具体例を挙げながら検討していきたい。生きることは働くことであり、「からだ」は労働手段や実践的行為の手段として、大切にしなければならないものである。「からだ」は手段ではあるものの、取り替えのきく道具ではなく、生活している主体と同義である。「体あつての物種」という、「からだ」が資本であるという見方は、「元気ですか」「お元気で」という、「からだ」に配慮した日常の挨拶に伺える。生活の中で生ずるこの身体観は無意識に誰もが抱いている実感だとも言えよう。この実感を意識化すると、さらに「からだ」を物としての道具として見てしまいがちになる。管理社会においては、実感を越えて「からだ」の道具化が加速される⁴⁾。

ところが「からだ」を道具というよりも、目

に見えない不安定な心を確保するものとして見られることもできる。肉体労働の減少した現代ではそのように思う人も多いであろう。その場合、心が大切なのであって、[からだ]は心の入れ物となる。よって、「人を外見で判断するな」という主張がなされる。また、「[からだ]に魂が宿る」という言い方も古くからある。心を安全に保つために、入れ物としての[からだ]に気を配る人も多いと言えよう。例えば、丈夫な[からだ]という鎧をまとうために、スポーツジムに通う人々は少なからずいる。また、心の入れ物としての[からだ]に関わって、健康問題が人々の関心の的にもなっている⁵⁾。この身体観の存在は、現在の日本では清潔癖を伴った除菌グッズの市場が大きくなっていることから推測できる。道具としての身体観とは別に、心の入れ物としての身体観も根強い。

その心の入れ物としての[からだ]が、<私>⁶⁾の心の表現媒体ともなる。スポーツ場面では、目立つ存在であることが何より優先される。目立つために派手な衣装と派手な行動をあえて選択することになる。生活場面では、日本独自の素顔を隠す「ガングロ」と呼ばれる化粧が2000年前後にブームを起こしている。また最近では、多くの女性が化粧に時間を掛け金銭を費やし、子供用化粧品さえも普及している。さらに、若い女性ばかりでなく若い男性さえ人前で化粧する、という場面を目撃することがある。このことを北山は、「とりわけ若者たちにとって、服装は、個人の尊厳の最後の拠りどころにさえなっている。」⁷⁾と述べている。また、ブランド品や貴金属を身につけ、外見を誇示する「セレブ」と呼ばれる人々がマスコミで取り上げられている。心の入れ物としての[からだ]を含めた外見こそが興味の対象となり、自己表現としての身体観に変容する。

しかし、それはもはや[からだ]が<私>の表現ではなく、[からだ]が<私>である、という外見に自己同一された状態を生み出すこと

になる。すなわち、<私>自身があたかも商品であるかのように思ってしまう。[からだ]として<私>を表現するという思いは、逆に<私>が[からだ]に絡み採られて、商品としての身体観に連動してしまうのである。だからこそ多くの若者にとって、商品価値を持つ外見こそが関心事となる。スポーツ場面では技術よりも外見を優先し、マスコミに取り上げられることが目標となる。その人の価値はどれくらいの収入を得ているかで判断されることになる。生活場面では「ヤンママ」が象徴的である。彼女達は、母親という社会的役割よりはむしろ、10代の派手な服装を身にまとう。さらには、自分の子どもを着飾らせて、まるでペットであるかのように連れ歩く。商品としての外見重視は、最近のプチ整形のブームに現れていると言えよう。この延長線上に、一部の女子中高生による「援助交際」があるのではないだろうか。日本の社会状況を観察すると、このような商品としての身体観が、現在主流になりつつあるようである。

また現在の日本では、[からだ]無視の無理な労働を強要する現状があると言える。不況による過労死が増え、運搬業者による交通事故が多発していることを、ニュースは伝えている。スポーツ場面でも、[からだ]を無視したやみくもなトレーニングが存在する。そこには心を優先する精神主義に加えて、[からだ]への無関心という状態がある。この[からだ]を無視した身体観もまた、現代に生じている一つの身体観だと言えよう。

これまで論じてきたように様々な身体観が混在しているとは言え、現在の日本で最も主流になりつつあるのが「商品化した[からだ]」だと言えよう。以下このことについて論じたい。グローバリゼーションによって地域性や独自性を失いつつある現在、健康に関する番組は数多く、健康とファッションに関わる商品のテレビ販売も盛んである。特にフィットネス関連器具

はアメリカの映像がそのまま流されている。そのマスコミで流される情報が、生活における様々な事柄の判断基準となりつつある。よって個別的な基準が育ちにくい。人前にでる場合にも、同一の規格の範囲で個性を提示しようとする⁸⁾。たとえば、茶髪・ピアスの蔓延であり、女子高校生制服のミニスカートであり、さらに携帯電話の異常な普及である。誰もが同じ服装と同じ商品を手にするのである。そこには独自性という指標は生じない。大方の同一性とわずかな差異だけが重要になる。多くの日本人がトレンドを追いかけ、金銭をかけて着飾ることに意識を向け、それが人前に出る前提となっていると言えよう。

特に若者が、みずからの「からだ」に商品としての価値がないと判断した場合、次のような病理的状况を作り出し易い。すなわち、彼(女)らは他者と直接的に関わることを忌避する。家にこもり、コンピュータや携帯電話を使い、もっぱら間接的なメールのやり取りをする。それしかできないし、それだけが楽しみとなる。つまり、身体的存在を無にしようとする。家に閉じこもるのではなく、公共の場で社会的問題を起こしている若者も少なくない。彼(女)らは身勝手な振る舞いや利己的行動を堂々と行っている。彼(女)らは「からだ」に無自覚であるが故にかえて、[からだ]に起因する気分振りに振り回されていると言えよう。このような状況は目立ちたがりやと孤立の共存とも言えよう。生活する上で身体的な実践能力は不可欠であるが、それへの無自覚・無関心がこのような状況を生じさせていると言えよう。報道番組を見れば、農村と都市の生活が均質化しつつある現在、以上のことが日本中で同じように生じていることが分かるであろう。

現代の日本人が抱く身体観には様々なものが混在しているが、その特徴を要約すれば、以下のようになるであろう。「からだ」とは、商品価値を持つものであり、もはや<私>の内面を

表現する媒体ではない。すなわち、表現する<私>は希薄であり、<私>が「からだ」に吸収されてしまう。商品価値を持つ「からだ」が<私>なのである。だからこそ、異常なほどに外見が配慮の対象となっている。その状態に健康ブームが重なり、外見としての「からだ」に多くの日本人が関心を寄せていると言えよう⁹⁾。

では、この身体観は日本人がこれまで抱いていた身体観とは異なって、全く新しいものなのであろうか。現代の身体観を明確にするために、日本における旧来の身体観について次節で論じたい。

3. 旧来の身体観

現代の日本では商品としての身体観が主流になっているとは言え、旧来の身体観も残存している。例えば、剣道・柔道・空手には「寒稽古」という伝統が生きている。それは無理な状況をあえて作り、心身を鍛える練習形態である。これは「しごき」という非合理的練習形態にもつながっている。この身体観に近似したものを祭りにおいて見ることができる。そこでは心意気を実践する「からだ」がその人であり、身体的存在として<私>が祭りに参加するのである。これらのことから、日本には心身一如観もまた保持されていると言えよう。現代の身体観をより明確にするために、この旧来の身体観について以下考察する。

日本には理想としての心身一如観という思想があった。例えば、江戸の人たちには「心によってからだを養い、からだによって心を養う」という、優れて全人的な人間観があった。¹⁰⁾ その養生法は単なるハウツウ式健康法ではなく、「そこには『いかに生きるか』という確固とした人生観が貫かれていた。」¹¹⁾と立川は述べている。この考え方を市川は日本独自の思想として、「われわれは精神と物体の二元論というより、むしろ身心一如であり、(中略)、<身>のあり方の相対的な差異相とし

て、二次的に＜身＞と＜心＞を弁別しているといえよう。」¹²⁾と述べている。彼は、「＜身＞とは、肉から心までをふくみ生き身としての人間存在全体を現すことばである。」¹³⁾として、大和ことばには身という用語があり、それは日本の独自の思想として生活を規定していると論じている。例えば現在でも会話において、「教養が身に付く」「身に沁みる」「人の身になる」と日常的に使われている。また、切腹とは体の潔白が心の証になる、と江戸の武士階級は考えていたのである¹⁴⁾。

この心身一体観には日本人の「多元的コスモロジー」¹⁵⁾が背景にある、と立川は述べる。庶民は「神さま、仏さま、ご先祖さま」に対して「困ったときの神だのみ」¹⁶⁾をした。この「かつての『願かけ』という習俗は、ハイテク時代の現代日本でもしぶとく生き続けているのである。」¹⁷⁾。お宮参り、結婚式、入学祈願、地鎮祭のように、人生の節目の儀式は神式で行われることが多い一方、葬儀は仏式が一般的である。日本には八百万（やおよろず）の神々がいたのであり、今なお地方の農家では、家屋の中に神棚と仏壇が同居していることは珍しくない。また、立川はいのちについても述べている。すなわち、「昔はいのちは『授かりもの』であり、人の手で自由にできるものではなかった。」¹⁸⁾。そこには、＜私＞は自分勝手に生きるのではなく「天命」¹⁹⁾を全うするのだ、という思想があった。この思想によって、多くの日本人には未だに整形への抵抗感が生ずる、と言えよう。

立川によれば、[からだ]については「体質」という視点が江戸時代にはあり、「健康を通して生き方を教えた江戸時代の貝原益軒の『養生訓』には、体力という思想はない。」²⁰⁾。しかし、江戸時代は既に身体軽視の思想もまた存在した、という主張もある。すなわち、「江戸時代は、(中略)、脳化社会の『はじまり』として位置づけられる。」²¹⁾として、「こ

の社会では、人間とは何なのか。それは心である。」²²⁾、つまり「この国は、江戸以来身体をなくした。」²³⁾と養老は述べている。また、山本によれば「武士は、武士として立っていくため、何より名誉を大事にした。名誉とは、言葉をかえれば世間の評判である。これは、当時は『外聞』という言葉で表現された」²⁴⁾のであって、「名を惜しむ武士的なメンタリティーは、最下級の武士のみではなく、武士身分ではない奉公人にまで共有されるものだった」²⁵⁾。だからといって、江戸時代は心の文化だとも言い切れないであろう。すなわち、個人的な心も体も名誉に吸収され、「自らにふさわしい死に場所を求めていた」²⁶⁾のである。このことは、振る舞いも[からだ]も名誉のために不可欠なものだったということである。先の体質という論点に戻れば、明治時代の指導者たちには、「国民の健康や病気の問題をあくまで『富国強兵』『殖産興業』という国家的スローガンと結びつけたイデオロギーがみられ」²⁷⁾、明治初めの日本人は「体格」と「体力」を同一視するようになり、「体力＝健康という思想は、その後長く日本人の健康観を支配してきた。」²⁸⁾と立川は述べている。

もともと人は世界に向かうとき、例えば何かの仕事をするとき、自分の[からだ]を意識しない。ところが病気になると、その人は仕事ができず、自分が役に立たないことを実感する。したがって、道具としての身体観が生ずることになる。しかし、これまでの日本人の身体観は、現代人が抱く道具としての身体観とは異なったものである。このような身体観を成立させる背景には次のような思想的風土があったと言えよう。すなわち、日本には、仏教思想・神道思想および儒教の影響をすべて受けながら、すべてを都合良く同居させる風土があった。神崎はこの理由を、「神道も仏教も『多神教』なるがゆえに習合も可能であった。」²⁹⁾と論じている。そこには自然との一体感が背景にあり、

いのちは授かりものである, という思想が保持されていた³⁰⁾. 要するに, 日本人の伝統的な身体観とは, [からだ] は生きるために不可欠な道具であり, それを優先させはするが, [からだ] への配慮は自己の責任として, <私>の存在と同一視していたと言えよう. [からだ] を大切にすることは生きて働くことなのである³¹⁾. 象徴的に言えば, [からだ] が動かないのではなく, <私>が動けないのである.

4. 身体観成立の背景

現代の身体観は, 前節で論じた心身を明確に区別しない旧来の身体観よりはむしろ, [からだ] を表面的な商品として見るという身体観へ移行してしまったようである. 何故このような身体観が現在の日本に成立したのであるのか. それについて, 現代社会と関連づけて以下分析したい.

何らかの身体観を抱くようになる過程を分析すると, 四つの要因が浮かび上がる. それらは, 次のような三つの理解とマスコミによる影響である³²⁾. すなわち一つ目は, みずからの [からだ] に関わる個人的体験に基づいた理解がある. それは自分の運動歴や病歴によって生じる実感に伴ったものである. 例えば, 病気になり辛く不自由な思いをすると, [からだ] の見方が変化する. これを感情的理解と呼びたい. 二つ目には, [からだ] に関わる社会通念, 伝統・慣習・マナーを通した理解である. それには宗教的な行事を通した理解も含まれるであろう. 例えば, 葬儀に参加すれば, それに相応しい振る舞い方を身につける. これを行動的理解と呼びたい. 三つ目は, 身体観の知的学習とも言えるもので, 科学 (健康観), さらに思想や哲学についての学習による理解である. 今日の日本では, 科学的知識の側面が人々に重大な影響を与えている³³⁾. これを理性的理解と呼びたい. 直接的な身体観の学習でなくとも, [からだ] についての知識は身体観を知ら

ない内に変容させると言えよう. そして四つ目がマスコミによる影響である. これは理解というより洗脳に近い事柄として考えられるであろう. 多くの人々は一方的な情報の受入を無自覚の内に行っている. これによって, 地域性を超えた情報や価値観が人々に流入する. 他方, 感情的理解と行動的理解は, 文化を含んだ社会の状況によって変化せざるを得ない. どのような社会階層 (職業), 集団に帰属するのかによって, 性別, 年齢による生活上の学習内容は変わらざるを得ないであろうし, 運動体験の内容も変わるであろう. 当然, 情報の量と質も生活環境から影響を受けることになる. すなわち, 生活環境の差異によって異なった身体観が生ずるということである³⁴⁾.

ところが, 現在の日本では大多数の人々が同質の生活を指向している, と言えよう. 安全快適な生活環境への指向は, みずからの [からだ] を実感する機会を減少させている. 理性的理解については, 原則的には学習指導要領によって全国共通である. 一般的に, 肉体労働が嫌われ, 何より利便の社会が優先される. 日常生活に必要となる具体的な情報の伝達回路は, 大家族から核家族へと移行する中で閉ざされ, 伝統的な風習や考えが喪失し続けている. さらに, 消費社会と情報化社会とが相乗的に進展し, 刹那的で金銭的な社会になっていると言えよう. その状況は隣人さえ疎遠になる都会の生活が好まれるという, 地域 (共同体) 社会から孤立社会への移行である. 個性尊重への異常な配慮がなされ, できるだけ他人に関わらない社会状況が生まれているのである. それによって社会を維持するために必要なルールさえ軽視されることにもなるであろう.

孤立しているために, 人々はマスコミに頼ることになる. しかも他者の目を気にし, 他者と同じことをしようとする日本人の特性が, マスコミに依存する状況をさらに増幅させているようである. それ故, マスコミによる情報操作に

安易に従う状況があると言えよう³⁵⁾。すなわち、現在の日本では、「トレンドは何か」が生活で重要な関心事となり、消費を生み出す流行によって均一化が生じている。たとえば健康産業やファッション産業では、ファッションモデルの大衆化があり、日焼けサロンで日焼けすることが高校生の間で流行し、身だしなみというよりも過剰な化粧への固執が生じている。現在の社会的価値付けの体系は経済を基盤に成り立っているが、日本人の多くはこのことに気づかず、マスコミの提示する情報に踊らされているようである。よって、[からだ]を商品として見てしまう状況が優勢となるのである。ほとんどの人がマスコミから多大な影響を受けているが、この背景には次のことも影響していると言えよう。すなわち、[からだ]を維持することに対する他者への依存である。例えば、トレーナー、医師、美容師がいて、彼らがすべての身体的問題を金銭的に解決してくれるのである。

ただし、旧来の身体観は全く過去のものというわけではない。儀式的な伝統は、「人がやるから」という表面的な意識に支えられているにしても、儀式として現在も残存している。その理由の一つとしては、都会に住み経済活動を優先する世代の背景に、地域に根ざして生活しているその親の世代が居て、彼らの孫たちが年中行事や盆の帰省の際に、彼らの文化を伝承する機会がまだあるからだと考えられる。また、村落共同体の見直しも行われているので、宗教的行事・祭りによる伝承も見直され始めている。このことは将来的に、現代の身体観を「商品としての[からだ]」ではなく「いのちとしての[からだ]」を重視する伝統的な方向に揺れ戻す可能性を秘めている。しかし、現状では大きな力にはなっていないと言えよう。

要するに、現在の日本では、マスコミの影響力が強く、自己の身体的存在を評価する場合、他者によって作られた判断基準が優先される、

という現状がある。すなわち、雑誌・テレビに登場する商品化された人々が身体的存在の基準となり、個人的な基準よりもむしろ他人の基準に依存している。よって、生活に根差し生活を支える[からだ]ではなく、他者に提示する[からだ]になってしまっている、ということである。つまり、商品としての身体観を多くの日本人が抱くようになった、と言えよう。

補足ではあるが、この身体観が好ましいものではないことをここで確認したい。なぜなら、[からだ]の成立要因を探る本考察の背景には、以下のような視点があるからである。現在の身体観には、生活を具体化する働きとしての[からだ]、という重要な視点が欠けている。その働きとは生理学的なものではなく、現象学的観点から[からだ]を捉えた場合の働きである。例えば共同作業を行うには、相手に合わせようとする気持ちだけではその作業を実践できない。それを具体化できる「働きとしての[からだ]」が不可欠になる。すなわち、その[からだ]なしには意図を具体化できないのであり、誰もがみずからの[からだ]を基盤にした実践しかできないのである。したがって、実践的な課題を解決するには[からだ]を賢くしなければならぬ³⁶⁾。その賢さによってこそ行動の可能性を広げることができる。つまり、実践的行為を具体化するためには、それを可能にする[からだ]が不可欠であり、[からだ]が変われば実践が変わり、世界が変わるのである。現在の身体観はこのことに全くといって良いほど目が向いていない。それは存在の希薄化であり、いのちの軽視につながるであろう。[からだ]そのものの働きを伝えることによって、我々は単にマスコミに踊らされることなく、具体的生活を豊かにすることが可能となるに違いない³⁷⁾。

5. 結 論

現代の日本において、人々はどうのような身体

観を保持しているのか、さらにそれはどのように生成されてきたのであろうか。われわれ日本人はかつてどのような身体観を持っていた。[からだ]を道具として見てはいるものの、単なる道具ではなく、＜私＞を具体化している道具として捉えている。そこには、[からだ]は授かりものであり、自分勝手に扱ってはならない自然と連続的な存在である、という考えがあった。その身体観が現在では希薄になり、多くの日本人が＜私＞の入れ物として[からだ]を捉えている。その入れ物自体が商品価値を持つようになった。さらに、入れ物としての[からだ]が＜私＞そのものにさえなっているのが現代である。要するに、商品としての身体観が現代の日本では主流となっていると言える。しかし、だからといって[からだ]を取り替え可能な部品として扱う段階にはなっていない。

このような身体観が日本に成立した背景には、科学の発展と、学校における科学的思考の教育、さらに科学ジャーナリズムの発展による知識の普及がある。それらによって人々は、[からだ]を科学的観点から分析的に見つめることになる。さらに、マスコミによって[からだ]の商品価値が宣伝され、人々の身体観に影響を与えている。それにもかかわらず、無意識とは言え、多元的コスモロジーという世界観が日本にはあり、それがわれわれの身体観に影響を与え続けている。すなわち、神道の影響を含め旧来の身体観がまだ残存していると言える。よって日本人には、[からだ]を商品として見るだけでなく、旧来の身体観も同時に保持されていることが推察できる。核家族と少子化による伝統的文化の屯承低下にもかかわらず、宗教的行事は儀式として生き続けており、それが日本人の身体観の一部を成立させているのである。

この旧来の身体観に目を向けることは、商品としての身体観に歯止めをかける契機になるであろうが、このことだけでは、行き過ぎた身体

の商品化を是正できないであろう。人々が具体的に充実した生活を送るためには、現象学的観点から捉えた[からだ]の働きに注目することが必要となる。その働きをより多くの人に分かり易く示すことは、われわれ体育教師の課題となるであろうし、さらに望ましい身体観を提示し、それを児童・生徒に教育することも、大きな課題となるであろう。

注および引用・参考文献

- 1) [からだ]という表記は、身体（働きとしてのからだの側面）と肉体（物としてのからだの側面）とを共に含み、心に対する用語として用いる。
- 2) 現象学の創始者はフッサール（Husserl, E.）である。現象学そのものについては、フッサール：立松弘孝訳（1965）、現象学の理念。東京、みすず書房。を、体育学としての現象学的方法については、滝沢文雄（1992）、体育学としての現象学的方法。体育・スポーツ哲学研究 14(1)：3-16。を、現象学的観点については、例えば Zaner, R.M. (1970), *The Way of Phenomenology: Criticism as a Philosophical Discipline*. New York, Pegasus. を参照されたい。また、現象学は思想運動としても捉えられている。これについては Spiegelberg, H. (1982), *The Phenomenological Movement: a historical introduction*. 3rd ed., London, Martinus Nijhoff. を参照されたい。
- 3) この態度についてレヴィナスは次のように述べている。「形相的諸学は、形相的直感の助けを借りて確立されるのであって、記述的なのである。『一つの事例』としての、具体的に与えられた世界から、つまり知覚された、あるいは想像された世界から出発することによって、われわれはその本質に到達し、そしてその必然的構造を記述する。」（レヴィナス：佐藤真理人／桑

- 野耕三訳（1991），フッサル現象学の直観理論．東京，法政大学出版局．pp. 164-165）
- 4) 三橋は管理社会の身体観について次のようにまとめている。「第一に，ここでは身体は，全く個的なものとしてとらえられて管理されている．しかし，第二に，個々の身体は，あくまで標準からのバラツキとしてとらえられる．つまり出来高という連続量によって個々の身体は並べられて管理されている．第三に，そうした尺度に合わない“個性”はマイナス要因としてしかとらえられない．第四に，これらのことは，身体が文字通り“道具”として，生産にかかわる他の素材や道具と全く同様に取り扱われていることを意味する．」（三橋修（1982），翔べない身体－身体性の社会学－．東京，三省堂．p. 175）
 - 5) 立川によれば，「健康ブームといわれる最近では，＜私＞たち日本人は『体調』ということばを口にするようになった．」（立川昭二（2000），いのちの文化史．東京，新潮選書．p. 172）．その背景には「現代日本人の健康不安という風潮が，第一に考えられる．」（立川，同上書，p. 173）．現在の日本は「健康におびえている時代，健康が売買されている時代，ファッションとしての健康の時代」（立川，同上書，p. 177）だと彼は述べている．
 - 6) ＜私＞という表記は，一般的な行為主体としての私を，筆者である私から区別するために用いている．
 - 7) 北山晴一（1999），衣服は肉体になにを与えたか－現代モードの社会学－．東京，朝日新聞社（朝日選書）．p. 231．
 - 8) 波平はこのことを次のように論じている．「身体のイメージは専ら映像中心になり，マスメディアの発達で，単一の身体イメージを大量に繰り返し流すようになる．それを受け取る人々は，知らず知らずのうちに，そのイメージを基準にして他者の身体を，次いで自分の身体を評価する．」（波平恵美子（2005），からだの文化人類学－変貌する日本人の身体観－．東京，大修館書店．p. 21）
 - 9) このような状況を踏まえ，しかも伝統的な心身一体観を背景に，日本の指導要領の記載（体育）には「心と体を一体としてとらえ」という文言が最近加えられた（文部省（1999），学習指導要領解説「小学校・中学校・高等学校：体育編」．小 p. 11，中 p. 15，高 p. 16．東京，東山書房）．しかし，生活の中では，旧来の身体観も儀式等に残存しているが故に，様々な身体観が混在している．よって日本人は，身体観については状況に依存した便宜的な説明をすることが多い．このことについては，滝沢文雄（2004），現象学的観点からの「身体一体観」再考：「身体観」教育の必要性．体育学研究 49（2）：pp. 147-158．において，心身一如観との関連で論じられているので参照されたい．
 - 10) 立川昭二（2000），いのちの文化史．東京，新潮選書．p. 180．
 - 11) 立川，同上書，p. 180．
 - 12) 市川 浩（2001），中村雄二郎編，身体論集成．東京，岩波現代文庫．p. 21．
 - 13) 市川 浩（1975），精神としての身体．東京，勁草書房．pp. 20-21．
 - 14) 切腹の理由として千葉は「視覚によって検討することが自他ともに本心・誠意を確認し合う手段」（千葉徳爾（1994），日本人はなぜ切腹するのか．東京，東京堂出版．p. 142）だったであろうと論じている．新渡戸は「それ（切腹）は特に武士にはにかかわしくあった．」（新渡戸稲造：矢内原忠夫訳（1938），武士道．東京，岩波文庫．p. 94）と述べている．切腹はまた，

「腹を切って臆病でないことを証明する」
 (山本博文 (2001), 『葉隠』の武士道－誤解された「死狂い」の思想. 東京, PHP新書, p. 162) ことでもあったようだ. 神崎は武士の「切腹は制度」(神崎宣武 (2003), 江戸に学ぶ「おとな」の粋. 東京, 講談社. p. 229) であると述べている. 切腹は死ぬことより名誉が重要視される社会的背景から生まれた制度だと言えよう. だからこそ切腹は「名をあげる場所」(山本, 前掲書, p. 97)なのである.

- 15) 立川, 前掲書, p. 179.
- 16) 神崎, 前掲書, p. 205.
- 17) 立川, 前掲書, p. 150.
- 18) 立川, 前掲書, p. 22.
- 19) 立川, 前掲書, p. 208.
- 20) 立川, 前掲書, p. 171.
- 21) 養老孟司 (1996), 日本人の身体観の歴史. 京都, 法蔵館. p. 121.
- 22) 養老, 同上書, p. 59.
- 23) 養老, 同上書, p. 64.
- 24) 山本博文 (2003), 武士と世間－なぜに死に急ぐのか－. 東京, 中央公論新社. p. 75.
- 25) 山本, 同上書, p. 74.
- 26) 山本博文 (2001), 『葉隠』の武士道－誤解された「死狂い」の思想. 東京, PHP新書. p. 96.
- 27) 立川, 前掲書, pp. 161-162.
- 28) 立川, 前掲書, p. 170.
- 29) 神崎, 前掲書, p. 205.
- 30) 湯浅の論述によれば, 東アジアの伝統的自然観は, 自然と人間は対立するものではなく, 「人間と自然の間には, 心身の全体を通じてホリスティックで共時的な対応関係が存在している」(湯浅泰雄 (1994), 身体宇宙性－東洋と西洋－. 東京, 岩波書店, p. 308)
- 31) 養生とは実践そのものだと貝原益軒は述べている. 「四民ともに我が家事をよくつと

めておこたらず, 士となれる人は, いとけなき時より書を読み, 手を習い礼節をまなび, 弓を射, 馬に乗り, 武芸をならひて身を動かすべし. 農・工・商は, 各其のことわざ(事業)をおこたらずして, 朝夕よくつとむべし. 婦女はことに内に居て, 氣, 鬱滞しやすく, 病生じやすければ, わざをつとめて, 身を労働すべし.」(貝原益軒: 杉靖三郎解説 (1968), 養生訓. 東京, 徳間書店. pp. 41-42). しかし, 江戸時代の思想家すべてがこのように考えていたわけではない. 徳川時代前期の代表的儒教思想家三人を扱った高橋によれば, 「藤樹・闇斎・仁斎の思想は, 心身の概念の意義に即して単純に整理すると, 心の絶対性と身の相対性, 心身の絶対性とその反面としての心身の相対性, 心の相対性と身の絶対性というように, それぞれ類型化できる.」(高橋文博 (1990), 近世の心身論－徳川前期儒教の三つの型－. 東京, ペリカン社. p. 289). 本考察では, これらの思想がどれだけ庶民に浸透していたのかを判断することはできないので, 思想よりも日々の生活を重視する庶民を想定している.

- 32) なぜこれらの成立要因が取り出されたのかについての詳細は, 滝沢文雄 (2005), 身体観の生成過程(その1)－身体観の成立要因およびそれについての質問紙－. 体育・スポーツ哲学研究 27(1): pp. 63-67. を参照されたい.
- 33) 宮地は, 「科学教育を通じてこのような物質主観的生命観や人間観が具体的な内容を伴って児童, 生徒の心の中にどんどん浸透しつつある一方で, 『いのちは貴いものだ』といくら説いてみても, どれほど児童, 生徒に『いのちの貴さ』が実感として捉えられるのであろうか」(宮地正卓 (2002), 「いのち」と「人間」の哲学－生

命科学との対話を軸に一．東京，北樹出版．p. 49) と，現状の科学教育に疑問を呈している．

- 34) 日本国内においても「からだ」のとらえ方に地域差・年齢差が生じている．滝沢(2005)，前掲書，p. 73. に，「からだ」に関わるアンケート結果が掲載されているので，参照されたい．
- 35) 中野も「市場経済があり，大量生産・大量消費があり，消費文化があり，他方史上空前の規模の広告活動があり，この両者が密接に結びついているという事実がある．」(中野収(2001)，メディア空間－コミュニケーション革命の構造－．東京，勁草書房．pp. 51-52) と述べている．また彼は「なかならず個人消費の集積よりなる消費

経済は，この(牽引力を持った)メディア空間なしに機能しえない．(括弧内引用者加筆)」(中野，同上書，p. 69) と述べている．

- 36) 賢い「からだ」という観点については，滝沢が幾つかの論文で扱っているが，例えば滝沢文雄(1998)，実践的能力としての「からだ」の賢さ－身体の現象学的考察一．体育学研究 43(2): pp.79-90.，滝沢文雄(1999)，生きる力に不可欠な「からだ」の現象学的考察－関わりとしての運動実践－．体育思想研究 5: pp.159-219. を参照されたい．
- 37) 身体観教育の必要性については，滝沢文雄(2004)，前掲書．において詳述されているので参照されたい．

受付 2006年3月 7 日

受理 2006年5月15日